

## IAEA 2000 年度核反応データセンター会議報告

### IAEA NRDC Meeting in 2000

札幌学院大学社会情報学部  
千葉 正喜  
CHIBA, Masaki  
Faculty of Social Information  
Sapporo-Gakuin University

2000 年度の核反応データセンター会議は、5月15日～19日に、ロシアのオブニンスクにあるロシア原子力研究所 (Institute of Physics and Power Engineering) で行われた。この会議には、各国の13データセンターなどから28人が参加していた。参加国・参加組織は、中国、ハンガリ、日本、韓国、ロシア、ウクライナ、アメリカ、OECD/NEAとIAEAなどである。

日本荷電粒子核反応データグループ (JCPRG) からは、加藤幾芳 (管理運営委員会委員長・北海道大学理学部) と私 (千葉)、それにオブザーバーとして大林由英 (北海道大学工学部ミームメディアラボラトリ) が出席した。日本からは、他に長谷川明氏 (日本原子力研究所) が出席していた。

今回の会議は、フルネットワークミーティングといわれ、各データセンターの責任者の会議であった。開会の挨拶、議長選出、会議日程を決めたあと、直ちに各データセンター等の活動報告があった。日本核反応データグループからは添付資料 (Progress Report to the NRDC Meeting May 15-19, 2000) を提出して加藤が報告をおこなった。

この会議で、新しく優先的に行なうべき仕事として、Webで核データベースをアクセスする新しいプラットフォーム独立な解を作る可能性を研究すること、書誌情報の検索と実験データまたは評価データを対話的グラフィック表示に統合化したツールの開発、Web版と同じ機能をCD-ROM版で作ることが議論された。

JCPRGからは、WP2000-25として「Development of charged-particle reaction data retrieval system on IntelligentPad: CONTIP, J. Information Science, 26(1) 2000, 29-37」を提出して、大林が「オブジェクト指向 IntelligentPad ソフトウェアによる荷電粒子核反応データの検索とグラフィカル表示」を発表して、この議論に加わった。

データベースの今後として、NNDCからはプラットフォームに依存しないデータベース、特にリレーショナルデータベースへの移行の必要性が提起された。そして、9月にワークショップが計画されていることが紹介された。関連して、昨年の会議で核反応データプロットイングのワークショップを組織する可能性を調べるようになっていたことについて質問したところ、会議としてこのワークショップを支持することになった (なお、このワークショップに大林が参加した)。

また、注目すべき提案は、Physical Review Cに出版される実験データをEXFORに収録する新しい手続きがNNDCのV. MacLaneから提案され、合意されたことである。

我々としては、NRDFへのデータの収集とEXFORへの変換で実績をあげることに更に力を注ぐ必要があることと、新データサービスの開発を促進することの重要性を実感させられた会議であった。

会議は、「結論」と「決定」を確認して採択した。次回のNRDC会議はテクニカルミーティングを2001年5月にウィーンで行なうことになった。フルネットワークミーティングの方はNEA-DBが2002年4月または5月にホスト役をするとの申し出を受けて、会議は終了した。

**Reference**

INDC(NDS)-418: Report on the IAEA Advisory Group Meeting on Network of Nuclear Reaction Data Centers